美術の窓(37)

宗達のヴィジョン

大和文華館館長　古川逸治

今秋の特別展は、絵屋俵屋時代の宗達の作品を陳列しまして、大変多勢の方々に見ていただき、私どもも皆様と御一緒に宗達の画の夢の様な美しさに陶然となりました。宗達は室町以来の様々の先例を学びながら自分の作品を段々と豊かに育て上げてゆきましたが、すでに慶長中頃から独自な世界を創造しています。それは、平家納経願文見返の豪華な神鹿図です。鈍く輝く銀色の地面を背後に、丸く高く背をまげて立つ牝鹿の暗い草叢に餌をもとめて、頭をかかげる優しい姿が、頭から肢足まで、光を浴びて黄金色に浮かびあがります。陰になった体部は暗色で、細い胴体を引締め現実感を与えますが、全身を縁どる大きな半円形の描線は動勢に旋律を加えます。背景は銀泥の地面の彼方に薄い明るさの金泥の大地が広がり、さらにその上を、明るい金色の空が覆います。そこに濃い金泥でたなびく雲を挿し入れる仕組みを作ります。宗達は、対象の姿態の立体をかため、現実性を充実し、活動態を描きながら、一種の幾何学的導線を加えて、精神性を授けることを考えます。さらに対象の置かれた空間の位置を示し、その遠近を整え、光を考え、明暗を配り、線的遠近図法よりも色調の明暗による遠近関係の描出法を用い、雰囲気の描出を考慮します。従って、余韻を漂よわせ、ここでも精神性を授けることになります。

今回の展観で注目を集めました扇面散貼付屏風の扇面草花図を二、三撰んで見ましょう。平家納経願文見返しの画像で観察したところと同じ様な点が、これらの図についても窺はれます。例えば、牡丹の図では、輝きを抑えた金泥のバックから豊かな花弁が光を受けて、白く浮かび出ます。一弁ごとに丁寧に慎重に明暗を染め、柔らかく影を含んだ線で外側から包むように記してゆきます。まんなかで細かい黄と白の色点を集めた大きな花芯が全体をまとめます。光が穏やかにものを包んで立体をつくり、その周囲に空気の漂う空間を設けて、牡丹の麗しい姿に詩情を添えます。下の方の早蕨図扇面では蕨の生ふる丘辺の地面を近く、中ほど、遠くと、金泥の明るさを三段、四段と染め分けて、近、中、遠と空間の遠近構成を作りだします。早蕨に緑の明暗度でゆったりしたヴォリュームを与えながら、その立ち並ぶ姿に遠近を作り、全体の奥行ある空間構成に弾みあるリズムを響かせます。

宗達は縁戚にあたる光悦の古今集、新古今集の和歌の書のために美しい料紙をととのえますが、雲母刷りや、金銀泥、箔の多用など、絵屋の仕事として、工芸のデザインとも親近な関係をもった技法を駆使します。ことに蒔絵などの図様は扇絵と共通する要素もあったと想像できます。町絵師の宗達は自から大和絵風の様々の画を学んで成長したことでしょう。また宗達研究家の指摘するように室町時代のいくつかの絵巻物の図絵からヒントを得ることも少なくなかったでしょう。彼の作品にはひろく大和絵の伝統の流れているのが認められます。しかし、それにもかかわらず、さきに述べた様に対象の動勢ある三次元的描出や、空間の構成における遠近関係の秩序、光についての関心、色調の明暗関係についての敏感さなど、新しく室町時代に導入された中国絵画の影響を感じざるを得ないと思います。宋、元、明の花木鳥獣の絵画の影響を考えずに平家納経願文見返しの神鹿図や扇面散貼付屏風の牡丹図などの対象描写はありえなかったでしょう。同じ屏風の早蕨の扇面図の空間の遠近構成の関心も室町水墨山水やその背後にあった中国山水画の空間構成の反映を考慮せずにはいられません。宗達は、これらの点で時代の絵画風潮に合流します。大胆な比喩を許していただけるならば、大和文華館蔵の李迪の雪中帰牧図を、金銀泥とか鮮やかな色彩の大きな面に翻訳したとすれば、宗達画の世界に近ずくのではないでしょうか。遠近空間図法の極みである『光』による空間の遠近構成は、同時に外的世界を画家の主観のうちに取り込むもので、客観的技法として出

平家納経願文(見返絵)厳島神社蔵

発した遠近図法は、この空気遠近図法（又は色調遠近図法）によって、外的景観をそのまま精神の映像に深化することの可能性を示すのです。そこから辻邦生の『宗達幻想』という表現も可能になってきます。宗達絵画の新鮮さは、宋画流の空気遠近図法を彼流の鈍粋絵画の構想でもって翻訳する結果から生じるのです。宋代山水画の影響を受けることは、ただその空間構成の技術を学ぶことだけではなく、この山水画の本質である宇宙の仙境を写すという神聖画像の神秘をも受けつぐのです。

宗達は、光悦の和歌に拠る王朝文化の復興に共鳴し、彼のヴィジョンも王朝文化の夢に満たされます。始めは人の世を神々の代[illegible]ぶ和歌を飾って、さまざまの[illegible]を連ねます。次いで心の強い[illegible]を美しいことばに綴る伊勢物語、源氏物語へと進み、能の演出の如く、養源院の岩に老松の襖絵、醍醐寺の舞人楽人、風神・雷神の屏風が現れ、関屋・澪標の傑作へと導かれます。国土の山中、海浜に、神仏不滅の霊界の現出を希求して、心情のざわめきを静め、生の行ないを浄めて、喜悦の輝きを呼び戻すという元和偃武以後の泰平謳歌の一大ヴィジョンを開くのです。

季刊 美のたより No.93
平成2年11月23日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.